

先週に続いて、ラザロ周辺の出来事から学びます。

### 1. 主イエスのベタニヤ訪問 (17～22節)



①イエスの到着 (17～18) 「それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた。ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。」これよりしばらく前に、イエスはヨルダン川の東におられました。そこに、ベタニヤのマルタとマリヤ姉妹から、兄弟ラザロが病で瀕死の状態にあるので、来てほしいという要請がありました。しかし、すぐには向かわず二日留まった後に、出発されました。ユダヤに行けば、迫害を受ける可能性もありましたが、そこに向かわれました。イエス一行は、ベタニヤに着きました。しかし、イエスが弟子達に予め言われた通りに、ラザロは既に死に、墓に葬られて四日もたっていたのです。ベタニヤの地理的位置はエルサレムから東に三キロほどのところで、エルサレムに行く時にイエスはよく立ち寄られた地でした。

②人々の弔問 (19～20) 「大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに来ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。」ラザロの死を受けて、大勢の人々が弔いとマルタやマリヤを慰めるためにやって来ていました。家族は周辺の人々にも愛されていたのでしょう。さて、イエスがベタニヤに来られたことで、行動的なマルタは早速に迎えに出ました。妹のマリヤは家で座って、お迎えする準備をしていました。

③マルタの訴え (21～22) 「マルタはイエスに向かって言った。『主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。』」主イエスを迎えたマルタは、悲しみと残念の思いを伝えます。「あなたがいてくださったら、ラザロは死ななくてすんだでしょう。」と少し不満も交じっていましたが、次の言葉は深い信仰の言葉です。「ラザロが死んだ今でも私は信じています。あなたが神にお求めになることは、神はあなたにお応えくださるのですから」。ああ、だからこそ、主がここにいてくださったなら・・・という事でしょう。

### 2. いのちの約束 (23～26節)

①よみがえります (23～24) 「イエスは彼女に言われた。『あなたの兄弟はよみがえります。』」マルタはイエスに言った。『私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。』」マルタの訴えに対し、イエスは「あなたの兄弟ラザロはよみがえります」と宣言されました。すると、マルタは死んで四日も経っているのです



から、それを終わりの日のこととしてとらえます。「そうですね。終わりの日には、主に従っていた人々はよみがえるわけですから、ラザロもよみがえるでしょう。」ここでは、マルタはラザロが地上の命でのよみがえりは信じられませんでした。

②よみがえりです (25)「イエスは言われた。『わたしはよみがえりです。いのちのです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。』」すると主イエスは言われたのです。「わたしはよみがえりです。いのちです。」(エゴーエイミ ヘー アナスタシス カイ ヘー ゴーウェー)。イエスのご自分の本質が復活でありいのちであると明言されているのです。そして、そのいのちは、人間にももたらされるといいます。それも主イエスを「信じる」ことを通して、「死んでも生きるいのち」が与えられると言われるのです。ここで「いのち」というのは、永遠の命(ゴウエー)のことで、地上での命(プシュケー)と区別されています。

③信じる者に与えられるいのち (26)「また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』」生きていてキリストを信じる者が、死ぬことがない、と主が言われたことの意味は何でしょう。それは地上の命の死を経験しないということではありません。人間が地上にあって生きている間に、主を信じるならば、ゴウエーなる命が与えられるのですから、そのいのちは、地上の命(プシュケー)が尽きても、終わることがないと言われているのです。そのことを伝えられた後に、キリストはマルタに問います。「あなたは、このことを信じますか」と。

### 3. マルタの信仰告白 (27~29 節)

①信仰告白 (27)「彼女はイエスに言った。『はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。』」すると、マルタはイエスに答えたのです。「はい。主よ。信じます。」と。続いて、彼女が理解してきたイエスのご本質を、信仰告白としていいます。「あなたが世に来られる神の子キリストです」。つまり、旧約聖書において預言されていたメシヤとは、イエス・キリスト御自身であると告白しているのです。キリストとは救い主という意味です。マルタはここで立派な信仰告白をしているのです。

②マリヤへの伝言 (28)「こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、『先生が見えています。あなたを呼んでおられます。』とそつと言った。』」主イエスはマルタに、そこにはいなかった妹のマリヤにやって来るようにとの伝言を与えられました。マルタはそれを受けて、帰宅するとマリヤにその旨をそつと伝えました。イエスは、死んで墓に葬られているラザロに起きる出来事を、マリヤにも伝え、姉と同様に主への確かな信仰をもって、出来事を迎えられるように、時を設けられたのでしょう。

③マリヤはすぐに (29)「マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。」マリヤ、主のご意思を汲んで、即座に立ち上がって、イエスのところに向かいました。マリヤは行動的ではないように見えますが、いざとなれば速いのだということがわかります。彼女にも、主イエスが教えられるいのちと復活の理解と信仰が求められるようになるのでしょう。

《結論》 ヨハネ 11 章序盤から「神にこそご栄光を」という導きをいただいでい

た私どもの群れですが、その最中に、現実的にそのことを真剣に迫られる出

来事に遭遇しました。ともにその御言葉をいただいた大高兄が先週、病に倒

れたからです。先週の記事では、マルタとマリヤの兄弟であるラザロが病から

死を得ました。主は今、いのちの問題を私たちに、改めて教えようとされている

と思われま。神は何事かを私たちに語りかけようしてくださっていると思わさ

れます。私たちは、何らかの難しい状況に置かれた時には、パニック状態に陥

りやすいです。しかし、今こそ、靈的に主に向き合いたいのです。

主イエスはラザロが死んだことを知っておられても、すぐに行動されずに二

日も待っておられました。それは弟子達が、イエスの言葉を確認するためでも

ありました。そして、時満ちてベタニヤに行かれました。失意の中にあつたマル

タが「もしここに主がいてくださったら・・・」と述べた時にも、イエスは彼女の

信仰を確かめられました。マルタは改めて、主に向き合つて、イエスを救い主

という信仰の告白をしました。

キリストは「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死

んでも生きるのです」(25 節)と述べられました。今回のテーマであるエゴー

エイミ(私は～です)。主イエスはいのちの源です。ゴウエー(永遠

の命)を  
もたらして下さる方です。また、イエスはよみがえりの主です。十字架  
にかけら  
れて死なれた後、三日目によみがえり多くの人々の前にその姿を示した  
下さ  
いました。またここでは、人々の前に、ラザロを通してよみがえりの御  
力を示し  
てくださいます。25 節にある御言葉の示す大事な点は、ラザロばかり  
でなく、  
キリストを信じる者にはゾーウェーという本当(永遠)の命が与えられ  
るという  
ことです。言い方を変えれば、信ずる者はいのちが与えられ、神との関  
係に回  
復が与えられて救われるということが示されているのです。  
「神の榮え」という題の信仰の詩があります。「私は喜びで満たさ  
れている。  
あの方は榮え、わたしは衰えねばならない(ヨハネ 3:29~30)。 わた  
したちの  
使命は、神さまの素晴らしさを伝えること。 自分の素晴らしさを伝え  
ることで  
はありません。使命を果たして去っていく、それがしもべの役割です。」  
この世に名を残すことは悪いことではありません。しかし、キリス  
トの栄光の  
御名に比べれば、人間の名はとるに足りないものです。むしろ、神の栄  
光が私  
たちを通して現わされることのほうが、麗しいのです。よみがえりの主  
のご栄  
光が、小さな私たちのうちに働きかけられて、外に現わされるならば、  
私たち  
のうちに、喜びという余人の知ることのできない祝福がもたらされるの  
です。一人の兄弟の病の出来事を通して、よみがえりの主は、私たち  
のうちに働  
きかけ、いのちの恵みを与え、ご自身のご栄光を示そうとしておられま  
す。この  
恵みにあずかるようにと、主はこの群れの一人一人に、今朝は格別に呼  
びか  
けてくださっています。あなたの傷ついた命にも、よみがえりのいのち  
の主は、  
回復をもたらしてくださいます。復活の主イエス・キリストを信じまし  
ょう。この

方のいのちの恵みにあずかりましょう。